

隠遁する

陽羅 義光

まずは「隠遁のススメ」、なかでも有名な言葉を出してみる。

兼好法師の【人と生まれたらんしるしには、いかにもして世を遁れんことこそあらまほしけれ】

道元禅師の【人多く遁世せざることは、わが身をむさぼるに似てわが身を思はざるなり】

年輪を重ねれば理解できる言葉ではあるが、実行となるとなかなか難しいものだ。

長明にも、西行にも、芭蕉にも、同じ意味合いの言葉があるが、それらを知っても何ら不思議は思われぬはずだ。

兼好や道元と同様に、何よりも実行者であるから。

だが、それが森鷗外だとしたらどうであろう。

夏目漱石と並び称せられる明治の文豪森鷗外の、かの有名な遺言【余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス】

この言葉の解釈は一筋縄ではいかない。

瀬沼茂樹は【「官権威力」に対する反逆の言】と書いている。

唐木順三は【官権への抗議】と書いている。

高橋義孝は【陸軍省や宮内省の具体的なやり口に対してやる瀬のない憤懣】と書いている。

果たしてそうであろうか。

もしそうならば、森鷗外の志向や思考や嗜好から考えると、さらに文学者としての闘う姿勢を見せつけられると、遺言を発するずっと以前にそのことを書くはずだと思われる。

これはおそらく少数意見であろうが、佐々木雄爾は【死に臨んでようやく発せられた「隠逸」「隠遁」の宣言であったのではないだろうか】と書いている。

森鷗外晩年の、史伝制作の根気を支えた太い芯が、【江戸時代への挽歌】だと考えてみると、佐々木雄爾の説が今日では正解ではないかと思われる。

東洋思想全般、日本人に馴染みのある次元では、禅や俳句に大きな影

響を受けたサリンジャーの「隠遁」もまた興味深く不可解でもあった。

その謎を解き明かしたのは、『サリンジャー・生涯 91年目の真実』（ケネス・スラウェンスキー）という本である。

多くは引用しないけれども、いくつかポイントになる部分のみ。

【これほどの 牡丹と仕かた する子かな 一茶は牡丹の花がそこにあると助言するだけでよかった、とサリンジャーは主調する。あとは読者次第というわけだ。「一茶は警察のように我々を強制しないのだ」から、我々は自分と向きあおうとしなければならないのだ。】

【第二次世界大戦中、数え切れないほどの兵士たちが、こんにち PTSD（心的外傷後ストレス障害）と呼ばれる症状に苦しんだ。（苛酷な戦争体験を味わったサリンジャーが、PTSDを乗り越えられたのは、書くことがあったからだ。）】

【サリンジャーと鈴木大拙との交流。大拙のキリスト教神秘主義と禅の思想が渾然一体となっていてところがサリンジャーの思考に合った。サリンジャーの信念。執筆と瞑想はおなじもの。ただ瞑想するように執筆することは孤独と集中力を必要とした。知名度や名声がもたらす喧騒は自分を執筆と祈りの両方を妨げるもの。】

ちなみに以下のこんな逸話は、あんがい知らない人が多い。

ジョン・レノン殺害の犯人、チャップマンが殺害後その場所で、サリンジャーの『キャッチャー・イン・ザ・ライ』を読み始めた。チャップマンはジョン・レノン殺害はサリンジャーの小説の影響だと主張。自分は、ホールデン・コールフィールド（『キャッチャー』の主人公・語り手）だと思いと説明。つまりレノンが新しいホールデンだと言い出すのが怖かった。ロナルド・レーガン大統領暗殺未遂事件の犯人ヒンクリーも『キャッチャー』の本を所持していた。

簡潔にまとめると、以下の通り。

苛酷な戦争体験→自分が思った以上の成功と虚名→東洋哲学の本格的勉強→禅、ヨガ、瞑想の虜→瞑想と執筆は同じ→孤独と集中力の獲得を欲する→現代文明嫌い、人間嫌い、田舎の自然の中で質素に暮らす→自作に関連した社会的事件や評論家のサリンジャー論や出版社の身勝手な思惑→うんざり感→発表しないで執筆のみ。

長い間「謎」とされてきた、サリンジャーの「隠遁」の経緯が、この

分厚い本からは読みとれる。

だが、森鷗外とサリンジャーの「隠遁」から（もしかすると、兼好や西行や芭蕉などの「隠遁」からも）人々が（なかでも曲がりなりにも文学に携わる者が）ごく普通に感じるのは、功なり名を遂げた文学者ならではの、唯我独尊的発想であり、ある種のエリート意識である。

くわえて、隠遁の精神の裡には、いささかなりとも「進歩」に対する反抗や疑念があるのではないかと思われる。

例えば（ほんの一例にすぎないのだが解りやすい事例をあげると）十九世紀までの戦死者の数よりも、二十世紀だけの戦死者の数のほうが圧倒的に多い。

そうした「進歩」への反抗や疑念である。

なお私見では、隠遁には、永世的な隠遁と季節的な隠遁がある。